あ　い　さ　つ

東山梨教育協議会
会長　永田　清一

「東山梨教育研究」第４８号発刊にあたり一言あいさつ申し上げます。

今年度の教育協議会総会の席上でも述べましたが，１９６４年（昭和３９年）今から４６年前に，この東山梨教育協議会が発足しました。

言うまでもなく，この組織は，校長会，教頭会，教育連合会の三者が対等な研究同人として組織された集合体であります。また，この教育研究組織の不滅のスローガンは「平和を守り真実を貫く民主教育の確立」と「国民の教育権の確立」であります。

なぜなのか？

私は２０数年前，研究推進委員長として，基調提案をこういう席から話したことを思い出します。

戦前・戦中の教育に関わった諸先輩方は，大戦に荷担し，多くの犠牲者を出してしまった強い自責の念と自省と，善し悪しにかかわらず，教育のなせる強大な影響力があるという、自覚からこのテーマを生み出したのではないかと思っています。

正しいと思ってやってきたその結果が，尊い命を失わせることに繋がり，焦土と化した国土の有様を目の当たりにし，慟哭の涙をどれほど流されたことか。

「二度と教え子を戦場に送らない。」と言う言葉は，自ずと生まれてきた心からの叫びだったかもしれません。

これは，単なる反戦と言うレベルの話ではなく，故郷を愛し，人を愛し，生きることを喜べる，子どもづくりに関わる職業人として，次代を担う主人公の育成のために，教育の中立性，普遍性を追求してきたからこそ，国民の教育権と民主教育の確立を声高に叫んだのだと思います。

こういったことをふまえ，教育活動の主役の一翼を担う私たち教職員は，独善的，独断的にならぬよう，自らの意志で集団による学習研究会を確立し，さまざまな意見や理論をぶつけ合い，日々行われる教育実践の積み重ねにより，教育活動の重要性や役割を追求し，今日に至っていると言えます。

本教育協議会が，一貫して「子どもを中心に据えた授業のあり方，学問のおもしろさ，学問の不思議さ，何より学問の楽しさを追求してきた」姿勢には頭が下がります。そして何より，本協議会には「仲間意識に支えられた、互いを鍛える」という文化があります。この文化こそが，私たち教職員を，尊敬される，強い，優しい人間に育て上げ，さらには信頼される教職員として成り立たせてくれました。これからも，会員相互，声を出して，丁々発止，議論をたたかわせることが互いを鍛えることと信じ，実践して欲しいと願わずにはいられません。

私たちは，児童・生徒や保護者から求められているその付託に応えるために，単に意見を伝え合うのではなく，プロとしての理論や実践をたたかわせることが一層必要です。鉄を打つのと同じように解釈していただければありがたいです。

説明責任を果たす理論武装と，子どもに向かう情熱と，豊かな表現力をもった教職員としての研究の場の効果は計り知れないものがあると信じています。

今年１年間の集大成としてのこの冊子に掲載された実践内容をさらに読み解き、参考にして今後の教育活動に行かして頂きたいと思います。

終わりに、各校の研究推進委員（研究主任）並びに，本会の研究推進委員長，支会研究推進委員長，事務局担当者に感謝申し上げます。ありがとうございました。